



東京部会(第138回)記録

日時: 2024年1月6日(土) 15:00 - 17:10

場所: 慶応義塾大学三田キャンパス東館オープンラボ

参加者: 会場10名、zoom19名、計29名

【内容要旨】

(1) 新しい参加者も多く、今回は、自己紹介から開始された。

(2) 臼井太一先生(都立足立新田高校)から「国際経済の授業」の報告があった。

最初に、勤務校の紹介があった。スポーツに力をいれている学校で、進路多様校であること、したがって、授業では受験対応ではなく、生活に根ざした内容を、生徒が社会にでて関心を持続できるようなものとしておこなっているとのことである。

今回の報告は、実践前の構想のもので、教科は「公共」、全三時間を想定して、1次で、食糧自給率と消費者傾向の矛盾からはじめて、2次で農作物に関する日本の貿易について資料をもとに考察させ、3次で農作物を輸入に頼り切ったままでよいかをテーマに討論させるというプランである。

メインエスチョンとして、「農作物を輸入に頼り切った形のままでよいか」を設定し、日本米とタイ米の価格比較から、価格は高いのになぜ国産品を買うか、その矛盾から、Q1として、「なぜ国産の米を買う選択をする人が多いか？」を考えさせるために、国産品の品質、安全性、日本の食糧自給率の低さのデータを提示する。

Q2として、「なぜ国産の消費志向が高い割に、食糧自給率がこんなに低いのか？」を投げかける。その考察のための資料として、比較優位の考え方を紹介、さらに耕地面積の狭さ、にもかかわらず農林水産物の輸出高が増えているデータを提示する。

Q3として、「なぜ食糧自給率が低いのに、輸入額が過去最大を記録したのか？」を考えさせる。そのための資料として国内市場が縮小していること、食糧安全保障に関する資料を提示し、これらの考察をもとに、メインエスチョンに戻り、輸入に頼ることの利点と欠点をそれぞれ三つ提示して、そこから自分の意見をまとめさせ、現状維持派と改革派に分かれて討論させるという流れである。

授業づくりの視点のまとめとして、生活している中で素朴に判断できる材料を使うこと、二つの矛盾する現象がなぜ起こるかを考えさせること、議論に入る前に教師から補助線を提供することの三つをあげた。

検討では、杉浦光紀先生(都立井草高校)から、農産物貿易での関税には触れないのかという質問があった。藤巻朗先生(並木中等教育学校)からは、生徒に自由に議論させて、生徒に農産物の輸出入、農業に関する問題を振ってしまって、広がった内容から、教師がここはぜひやりたいという内容を絞るやり方がよいのはというアドバイスがあった。

善財利治先生(印西市立西の原中学)からは、生徒はタイ米を知っているか食べたことがあるかという質問があり、直接食べさせなくとも、写真などで具体的なイメージをつかませるところから始めるとよいという示唆があった。

河原和之先生(立命館大学他)からは、前半の食糧自給率の問題と、後半の貿易の問題が分かれているので、後半に入る前に生徒に討論させる場を作ると良いというアドバイスがあった。また、農業貿易に関しては国によって違うので、いくつかの国を具体的にあげて考えさせるとよいとのアドバイスがあった。

新井からは、米の比較をするなら同じ種類(単粒米)にすべき、比較優位の具体例を再考する必要がある、農産物の輸入のメリットに関しては再考する必要がある、討論の形式の再考が必要ではないかという指摘があった。



篠原代表からは、視点が多岐にわたっているが、理論は必ず生活実感だけでゆけばよい、その際はデータの出し方が重要である。この授業の場合は、日本の農産物でどのようなものが輸入され輸出されているか商品別に分けて提示するのも一方法であるとの指摘があった。

大倉泰之先生(大学入試センター)からは、盛り込みすぎで、この授業から何を議論するかが見えてこない。食糧安全保障は政治も含めた広がりがあるので、それだけを切り取って、大項目Cで実施するとよいのではないかと。また、解決策は何かという問いを議論させることがあるが、生徒に解決策が分かればとすぐに大人が解決しているので、生徒には関心を持ち続けて欲しいということが伝えられれば良いのではないかとというアドバイスがあった。

(3) 杉浦光紀先生(都立井草高校)から「グローバル経済の授業-生徒にどう教えるか?-」の報告があった。

春の経済教室でのパネルディスカッションで提示する予定の、実践例の紹介である。

テーマを勤務校の生徒の実情(自由服の学校)であることを踏まえ、テーマを「ファストファッションは、なぜ安いのか?」として、1コマ目は、写真と映像を用いて、なぜ国際貿易をおこなうか、どんな問題が起きるのかの問題提起をする。2コマ目は、あなたは一年で何枚の服を買っているかの間をなぜ、そこからファストファッションによる利益構造や途上国の貿易構造の変化、ファストファッションに伴う環境破壊に関する事実をしらべ、ソーシャルグッドなアイデアを構想せよという課題を課す。3コマ目に、貿易ゲームに取り組みさせるという流れの実践である。

振り返りで生徒の書いた文章(80字程度を二文で書く)が紹介され、写真タイトルやインタビューに赴いた生徒の例が紹介された。また、テストでの評価問題の紹介があった。

検討では、新井から、要素が多く入れ込みすぎではという感想と、この授業から生徒に何をつかませるのかという質問があり、杉浦先生からの回答と、春の経済教室でさらに検討して紹介したいとの表明があった。

(4) 小谷勇人先生(春日部市立武里中)から「経済の視点を意識した「貧困」についての授業実践 現在の方向性」という報告があった。

杉浦先生と同じ、春の経済教室でのパネルディスカッションで提示する実践例の取組みに関する報告である。実践は2月に予定されている。

「貧困の解決にどのような取組みが必要か」をメインテーマとして、二つの案を考えているとして二つのプランが紹介された。一つは、既習の政治・経済の視点で貧困問題を整理し、「貧困問題の解決に向けて、どのような取組みが必要でしょうか?」という問いを解決使用とする実践で、導入で貧困線を用いて貧困を定義して、政治と経済に分かれて貧困問題の原因を追究させて、全員、個人でまとめさせるオーソドックスな授業である。その際には、経済成長とイノベーションの記述をしている生徒に焦点をあてて、リープフロッキングの話をする。

もう一つの案は、地理的分野ではアフリカに関して指導要領では貧困を主題例としていないが、奴隷、スラム、植民地、モノカルチャー経済などから負のイメージがあるが、それを打ち破る意味も込めて「21世紀はアフリカの時代といわれているのはなぜか?」、「アフリカ経済成長大作戦」などの課題をいれた授業の構想である。

報告の最後に、前者で考えていたが、後者も魅力的であり、どうすべきかのアドバイスが欲しい、また、高校との棲み分けはどうかとの質問が小谷先生からあった。

検討では、塙枝里子先生(都立農業高校)から、高校ではなかなか国際の授業に踏み込めていないとの報告があった。

杉田孝之先生(千葉県立津田沼高校)からは、同じく高校では踏み込めていないこと。貧困の問題では地域による違いに注目させて、違いと共通性をつかませることが目指す方向になるのではとの意見があった。

河原和之先生からは、中学ではほとんどやっていないが、最近の例ではチョコレートに焦点をあわせて、ブラッ



経済教育ネットワーク
Network for Economic Education



クサンダーの会社の取組みなどを紹介して、最後の授業のメッセージとして現在の社会の裏側にある現実をさらせて、「きみたちはどう行動するか」と問う授業ができるのではというアドバイスがあった。また、アフリカの貧困に関しては、地理的条件、歴史的条件の不利があるが、前回の大阪部会で紹介したダイヤモンドの例のように政府の役割も大きいことを伝える授業が求められるとの指摘があった。

大倉泰之先生からは、貧困に関しては、現実とのつながりを自覚させる授業となればよく、解決をいわずらに求めないことが大切ではとの指摘があり、後者の要素も含めた前者の授業を検討されたらどうかとの示唆があった。

(5)最後に、新井から、春の経済教室の案内、1月1日の能登半島地震に対する支援のアピールがあり、また、1月2日の羽田での飛行機事故の背景やそこでの情報に関して、加藤一誠先生(慶応義塾大学)からの情報提供があり、部会を終了した。

(記録と文責:新井)

次回開催予定: 未定 次年度の年間計画を見て、決定する。